

円成実性を基軸とする三性説の特徴と 思想史上の意義について

—三宝尊『仏母般若波羅蜜多円集要義論註』における三性説—

飛 田 康 裕

1. 問題の所在

インドの大乘仏教を牽引した流派に、瑜伽行派 (yogacāra-) と中観派 (mādhyamika-) との二大流派がある。そして、このうちの瑜伽行派が立てた学説に唯識説がある。この唯識説とは、ただ認識の存在のみを認め、この唯一存在する認識を基軸として、全世界の一切の存在や現象を説明せんとする説である。これを簡潔に示せば、以下のように説明できる。すなわち、一般的に存在すると考えられている全世界の一切の事物や現象は、実は、存在しない。しかし、一般的には感知されない認識のみが存在している。それでは、全世界の一切の事物や現象は如何にして存在しているかのように見做されるのかと言えば、それは、その感知されない認識が、全世界の一切の事物や現象の顕現を持って生起しているからである、と。また、この瑜伽行派は、三性説という学説を立てたことでも有名である。この説の来歴については後述するが、簡単に言えば、ありとあらゆる存在を三つに分類する学説である。それでは、その三性とは何かと言えば、それは、(1) 遍計所執性 (parikalpitasvabhāva-)、すなわち、存在しないにもかかわらず存在するものとして概念的に構想されている存在、(2) 依他起性 (paratantrasvabhāva-)、すなわち、それ自体とは別の原因に依存して生起している存在、そして、(3) 円成実性 (pariṇiṣpannasvabhāva-)、すなわち、完成したあり方、あるいは、完成した存在である。勢い、この三性説は、唯識説と結びつき、唯識説によって統合されることとなる。その際、唯一存在するものと考えられている認識は、それ自体とは別の原因に依存して生

(10)

起しているものであるがゆえに、依他起性に配当されることとなる。一方、存在しないにもかかわらず存在するかのように考えられている全世界の一切の事物や現象は、概念的に構想されたものにすぎないがゆえに、遍計所執性に配当されることとなる。そして、その唯一存在すると言われる認識には、一般的に存在すると考えられているような事物や現象のあり方が存在していないが、円成実性は、そのようなあり方を欠いているというあり方（空性）として理解されることとなる。つまり、認識である依他起性を基軸として、認識を抛り所とする遍計所執性と認識の有する空性である円成実性とが説明されるのである。

ところが、三性説の中には、以上のように依他起性を基軸とする一般的な三性説とは別に、円成実性を基軸とする特異な三性説が存する。それは、三宝尊（Triratnadāsa, ca. 5世紀後葉—6世紀初葉）が、その著書『仏母般若波羅蜜多円集要義論註』（Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgrahavivaraṇa, PrPPSV）の中で提示した三性説である。およそ5世紀後葉から6世紀初葉に活躍し、仏教論理学の道に先鞭をつけた著名な学僧に陳那（Dignāga）がいる。彼は、論理学の論書に加えて、『般若波羅蜜多経』の註釈書である『仏母般若波羅蜜多円集要義論』（PrPPS）をも記している。そして、この論書に対する更なる註釈が、『仏母般若波羅蜜多円集要義論註』（PrPPSV）であり、これを纏め上げた人物が、三宝尊である。なお、チベットの伝承では、三宝尊は、陳那と同時代の人と伝えられている。

それでは、この三宝尊が説いた円成実性を基軸とする三性説には如何なる特徴があるのか。また、この三性説には如何なる意義があるのか。

これについて考察するにあたり、以下では、まず、依他起性を基軸とする三性説を確認するために、世親（Vasubandhu, ca. 4世紀）による『中辺分別論』（Madhyāntavibhāgaśāstra, MAVBh）の三性説を例として示し、次に、三宝尊による円成実性を基軸とする三性説の特徴について考察し、最後に、最古の三性説と思しき『解深密経』（Saṃdhinirmocanasūtra, SNS）における三性説（三相説）とそれとを比較して、その意義について述べることにする。

2. 依他起性を基軸とする三性説：世親『中辺分別論』の例

さて、瑜伽行派における唯識説においては、一般的には感知されない認識のみが肯定され、その一方で、一般的に存在するものと考えられている全世界の一切の事物や現象は否定される。『中辺分別論』(MAVBh)においては、このことを以下のように示している。

MAVBh 17, 16-18, 3: abhūtaparikalpo 'sti dvayaṃ tatra na vidyate/ śūnyatā vidyate tv atra// [I. 1] tatrābhūtaparikalpo grāhyagrāhakavikalpaḥ. dvayaṃ grāhyaṃ grāhakaṃ ca. śūnyatā tasyābhūtaparikalpasya grāhyagrāhakabhāvena virahitatā (虚妄分別 (abhūtaparikalpa-, 虚妄なものを構想しているもの)は存在する。そこ(虚妄分別)には二つのもの(dvaya-)は存在しない。しかし、そこ(虚妄分別)には空性(śūnyatā-, [二つのもののあり方を] 欠いているというあり方)が存在する。[I. 1] ここにおける虚妄分別とは、所取(grāhya-, 把握されるもの)と能取(grāhaka-, 把握するもの)とを[概念的に]構想しているもの(vikalpa-)である。二つのものとは、所取と能取とである。空性とは、その虚妄分別が所取と能取というあり方を欠いていることである)。【1】

瑜伽行派において一般的には感知されないが唯一存在するものと考えられている認識は、ここにおいては、「虚妄分別」(abhūtaparikalpa-)という語で示されている。そして、その虚妄分別の存在することが、截然と明言されている。一方、一般的に存在するものと考えられている全世界の事物や現象は、知覚によって把握されるものと把握する知覚とによって網羅されるが、ここでは、これを「二つのもの」という語で示している。そして、この所取・能取という二つのものの存在しないことが、断然と断言されている。

それでは、「二つのもの」が存在しないとするならば、それらは如何なるメカニズムに基づいて、存在するかのように見做されるのかと言えば、『中辺分

(12)

別論』(MAVBh)は、それを以下のように示している

MAVBh 18, 19-26: abhūtaparikalpasya svalakṣaṇaṃ khyāpayati — artha-sattvātmavijñaptipratibhāsaṃ prajāyate/ vijñānaṃ// [I. 3] tatrārthapratibhāsaṃ yad rūpādibhāvena pratibhāsate. sattvapratibhāsaṃ yat pañcendriyatvena svaparasantānāyor<> ātmapratibhāsaṃ kliṣṭaṃ manah. ātmamohādisaṃprayogāt. vijñaptipratibhāsaṃ śaḍ vijñānāni (虚妄分別の……固有の特徴を明らかにする——対象と生類と自我と認識の顕現を有する識が生起する……。[I. 3] このうち、対象の顕現を有する〔識〕とは、何であれ、色(rūpa-)などとして顕現する[場合の識である。]生類の顕現を有する〔識〕とは、何であれ、自己という一貫したものと他者という一貫したもの(svaparasantāna-)における5つの感覚器官(indriya-)として顕現している[場合の識である。]自我の顕現を有する〔識〕とは、染汚意([煩惱によって]穢されている思考)である。[染汚意は、]我癡(ātmamoha-)などと[常に]相応しているがゆえに、[自我の顕現を有するのである。]認識の顕現を有する〔識〕とは、[眼識から意識に至るまでの]6つの認識である)。[2]

所取・能取という「二つのもの」は、具体的に言えば、対象と生類、そして、自我と認識に分けることができる。このうち、対象と生類とは、知覚によって把握される所取に当たり、自我と認識とは、把握する知覚である能取に当たる。そして、これらは、前述の通り、存在しないものとされるが、ここでは、これらの対象・生類・自我・認識を顕現として有する識が生起すること、すなわち、四種の事物を顕現として有する虚妄分別が生起することに基づいて、これらが存在するかのごとくに見做される現象を説明している。

さらに、瑜伽行派は、以上のような唯識説に三性説を統合することとなるが、『中辺分別論』(MAVBh)では、これを以下のように説明している。

MAVBh 19, 15-20: abhūtaparikalpamātre sati yathā trayāṇām svabhāvānām saṃgraho bhavati. kalpitaḥ paratantraś ca pariniṣpanna eva ca/arthād abhūtakalpāc ca dvayābhāvāc ca deśitaḥ// [I. 5] arthaḥ parikalpitaḥ svabhāvaḥ. abhūtaparikalpaḥ paratantraḥ svabhāvaḥ. grāhyagrāhakābhāvaḥ pariniṣpannaḥ svabhāvaḥ (虚妄分別しか存在しない場合に、三つの独自の存在が如何にして「虚妄分別に」統合されるか「を説いて曰く——」)「概念的に」構想されたもの、他に依存するもの、そして、完成したもののみが「存在する。そして、それらは、それぞれ、」事物「という観点」から、虚妄分別「という観点」から、そして、二つのものが存在しないこと「という観点」から、示されたのである。[I. 5]「存在しないにもかかわらず、存在するものとして過剰に肯定されている対象や生類や自我や認識といった」事物が、遍計所執性（完全に「概念的に」構想されている独自の存在）である。虚妄分別が、依他起性（他に依存している独自の存在）である。所取と能取が存在しないことが、円成実性（完成した独自のあり方）である。[3]

これによれば、虚妄分別である依他起性を中心に据えて、存在しない所取と能取とを遍計所執性に配当し、そして、虚妄分別に所取と能取とが存在しないことを円成実性に充てている。

以上の事柄をまとめると、『中辺分別論』（MAVBh）に見られる一般的な三性説は、以下の表のように示すことができる。

三性	三性の内容
遍計所執性	[所取 (grāhya-)・能取 (grāhaka-) という] 二つのもの (dvaya-) (対象・生類・自我・認識という事物 (artha-))
依他起性	虚妄分別 (abhūtaparikalpa-) (対象・生類・自我・認識という顕現を有する識 (vijñāna-))
円成実性	空性 (śūnyatā-) (虚妄分別に二つのものというあり方が存在しないこと)

【A】

3. 円成実性を基軸とする三性説：

三宝尊『仏母般若波羅蜜多円集要義論註』の例

虚妄分別である依他起性を基軸とする以上の三性は、唯識説を以って三性説を統合する場合には、極めて順当な説であると考えられる。ところが、三宝尊 (Triratnadāsa-) は、この流れに反して、その著書『仏母般若波羅蜜多円集要義論註』 (PrPPSV) の中において、円成実性を基軸とする三性説を建立する。三宝尊による『仏母般若波羅蜜多円集要義論註』は、陳那による『仏母般若波羅蜜多円集要義論』 (PrPPS) に対する註釈であるから、まず、三性説に関する陳那の記述を以下に確認する。

PrPPS: prajñāpāramitāyāṃ hi trīṇ samāśritya deśanā/ kalpitam paratantram ca pariniṣpannam eva ca//27// nāstīyādīpadaiḥ sarvaṃ kalpitam vinivaryate/ māyopamādidrṣṭāntaiḥ paratantrasya deśanā//28// caturdhāvyavadānena pariniṣpannakīrtanam/ prajñāpāramitāyāṃ hi nānyā buddhasya deśanā//29// (なぜなら、『般若波羅蜜多 [経]』においては、三 [種のあり方] に基づいて説示があるからである。[三種の存在のあり方とは、完全に概念的に] 構想されているもの (遍計所執性)、他に依存しているもの (依他起性)、そして、完成したもの (円成実性) である。[27] 「存在しない」云々という [『般若波羅蜜多経] の] 章句によって、[完全に概念的に] 構想されているものが、すべて、取り除かれる。「幻のようなもの」などという [『般若波羅蜜多経] の] 喩例によって、他に依存しているものが説示される。[28] 四種の清浄なるものによって、[世尊は] 完成した [もの] を陳述なさっているのである。実に、『般若波羅蜜多 [経]』には、[以上の三つのあり方とは] 別の仏陀の説示は [存在し] ない [29])。[4]

これによれば、陳那は、種々の『般若波羅蜜多経] も、全ては、三性説を説示することを目的していると考えたことが分かる。そして、その経中における「存

在しない」云々という言説は、遍計所執性を否定したものであり、「幻のようなもの」云々という言説は、依他起性を示したものであり、そして、四種清淨に関する言説は、円成実性を述べたものと解釈している。

さて、三宝尊は、その『仏母般若波羅蜜多円集要義論註』（PrPPSV）の中において、ここに示される遍計所執性を解説して、以下のように述べる。

PrPPSV P348a4f./ D305a2f.: de la **brtags pa** zhes bya ba ni sngon po la sogs pa ^[P348a5] gang zhig yongs su ma dag pa'i ^[D305a3] shes pa la gzung ba dang 'dzin pa tha dad par snang ba de la brjod de/ byis pa rnam kyis brtags pa'i phyir ro//（このうち、「完全に概念的に」構想されているもの」（brtags pa, *kalpita-）とは、青など（sngon po la sogs pa, *nīlādi-）である。或るものが、[未だ] 清められていない智（yongs su ma dag pa'i shes pa, *apariśuddhajñāna-）の上に、所取（gzung ba, *grāhya-, 把握されるもの）や能取（'dzin pa, *grāhaka-, 把握するもの）という多様なあり方で顕現している場合に、そ[の所取や能取という多様なあり方で顕現しているもの]に対して[その青などが] 説かれるのである。[その青などは、] 愚者（byis pa, *bāla-）たちによって[完全に概念的に] 構想されているものであるがゆえに[完全に概念的に構想されているものと呼ばれるの]である）。【5】

ここにおいては、二つの存在が示されている。

一つ目は、「所取や能取という多様なあり方で顕現しているもの」である。また、これは、「[未だ] 清められていない智」の上に立ち現れているものであるから、所取・能取を顕現として有する未だ清められていない智とも言うことができよう。そして、二つ目は、「青など」の事物である。しかし、これは、所取や能取という顕現に対して、あるいは、それらを顕現として有する未だ清められていない智に対して、「説かれる」ものであるから、実際には、“青”などという言葉、あるいは、概念と見做されよう。このうち、遍計所執性は、二つ目に示した“青”などという言葉、あるいは、概念と考えられていることが

(16)

知られる。

次に、三宝尊は、『仏母般若波羅蜜多門集要義論註』(PrPPSV) の中において、依他起性を解説して、以下のように述べている。

PrPPSV P348a5f./ D305a3f.: gzhan gyi dbang zhes bya ba ni gang zhig gnyis med pa'i shes ^[P348a6] pa la rang gi ngo bor rnam par gnas pa na ma rig pa'i dbang gis na gnyis su snang ba ste/ de ni ma rig pa'i gzhan gyi ^[D305a4] dbang yin pa'i phyir na gzhan gyi dbang zhes brjod do// (「他に依存しているもの」(gzhan gyi dbang, *paratantra-) とは、[所取・能取という二つのものの顕現である。] 或るものが、[所取・能取という] 二つのものを有しない智 (gnyis med pa'i shes pa, *advayajñāna-) の上に、[すなわち、] それ自体 (rang gi ngo bo, *svabhāva-) [のみ] で確立しているものの上に、無明に依存すること (ma rig pa'i dbang, *avidyātantra-) によって、二つのものとして顕現している場合、そ [の二つのものの顕現] は、無明という [二つのものを有しない智とは] 別のものに依存しているがゆえに、他に依存しているもの [と呼ばれるの] である)。【6】

ここにおいてもまた、二つの存在が示されている。

一つ目は、「二つのものを有しない智」である。また、この智は、「それ自体 [のみ] で確立しているもの」であるとも言われている。よって、この智は、独立自存する無二智であると見做されよう。そして、二つ目は、「[所取・能取という] 二つのものとして顕現している [もの]」である。このうち、依他起性は、二つ目に示した二つのものの顕現と考えられていることが知られる。

ところで、ここに示される依他起性は、先の遍計所執性の説明の中で現れた「所取や能取という多様なあり方で顕現しているもの」と同じものである。そして、ここでは、この二つのものの顕現が、独立自存する無二智の上に展開するものであることが示され、かつまた、「無明に依存することによって」と言って、この顕現を成立させる要因が「無明」であることが示されている。このこ

とより、所取・能取という顕現、あるいは、それらを顕現として有する未だ清められていない智は、無明により何らかの変容を遂げた無二智であると考えることができることとなる。

第三に、円成実性について、三宝尊は、『仏母般若波羅蜜多円集要義論註』(PrPPSV)において、以下のように解説している。

PrPPSV P348a6f./ D305a4: yongs su grub pa zhes bya ba ni ^[P348a7]gzung ba dang 'dzin pa'i (P; 'din pa'i D) rnam pas dben pa'i rtogs pa (P; rtog pa D) gang yin pa 'di yin te/ de ni yongs su grub pas na yongs su grub pa zhes brjod do// (「完成したもの」(yong su grub pa, *pariṇiṣpanna-)と言われるが、所取と能取という形相を離れている知覚(rtogs pa, *saṃvedana-)がある場合、それが[完成したもの]である。そ [の所取と能取という形相を離れている知覚] は、完成しているがゆえに、完成したものと呼ばれるのである)。【7】

ここでは、円成実性として、「所取と能取という形相を離れている知覚」を挙げている。『中辺分別論』等が、認識にある「空性」というあり方を円成実性として定めるのに対して、「知覚」を円成実性として挙げているところが極めて特異な点である。さらに、この知覚は、先の依他起性の説明の中で現れた「[所取・能取という] 二つのものを有しない智」と同じであるから、「それ自体 [のみ] で確立しているもの」であることにもなる。

それでは、「それ自体 [のみ] で確立している [知覚]」は、つぶさには、如何なる知覚と知られるべきか。以下に示す『仏母般若波羅蜜多円集要義論註』(PrPPSV)の表述は、その知覚のあり方を示唆するものと考えられる。

PrPPSV P356a6ff./ D311b3f.: rtogs ^[P356a7]pa'i rang bzhin ^[D311b4]rang rig pa tsam ni 'dzin par byed pa'i sgras brjod pa ma yin no// 'di ltar rtogs par byed pa'i rang bzhin ni phan tshun ltos nas (D; bltos nas P) rab tu brtags pa ma yin te/ rang gi ^[P356a8]rgyu (P; rgyud D) las de ltar skyes pa'i phyir

ro// (【定説者】しかし、覚知というあり方を有するもの、[すなわち、認識] それ自体の知覚だけは、能取という語によつては説かれていないのである¹。というのも、覚知というあり方を有するもの[である認識それ自体の知覚]は、互いに依存し合つて構想されているものではないからである。[何となれば、覚知というあり方を有するものである認識それ自体の知覚は、認識] それ自体 [のみ] を原因 (rgyu, *hetu-) として、そのように [覚知というあり方で] 生ずるがゆえにである²)。【8】

先に述べられた「それ自体 [のみ] で確立している [知覚]」は、以上に記された「[認識] それ自体を原因として」いる知覚であると考えられよう。そして、この文によれば、この「[認識] それ自体 [のみ] を原因としている」という属性は、「[認識] それ自体の知覚」という事物に属するものであることが分かる。このことより、円成実性として示される「二つのものを有しない智」は、「[認識] それ自体の知覚」であることが分かる。なお、「[認識] それ自体の知覚」とは、自分自身を認識対象として自己完結している知覚、つまり、自己認識のことである。

以上をまとめると、三宝尊の『仏母般若波羅蜜多円集要義論註』(PrPPSV) における三性説は、以下の表のように示すことができよう。

-
- 1 Cf. AAJP 81,10-82, 3: na tu bodharūpaṃ svasaṃvedanamātrāṃ grāhakaśabdenocyate (しかるに、覚知というあり方を有するもの、[すなわち、認識] それ自体の知覚だけは、把握するものという語によつては説かれていないのである)。
 - 2 Cf. AAJP 82, 3f: na hi bodharūpaṃ parasparāpekṣāprakalpitaṃ, svahetor eva tathotpannatvāt (というのも、覚知というあり方を有する [認識それ自体の知覚] は、相互に依存して構想されているものではないからである。[何となれば、覚知というあり方を有する認識それ自体の知覚は、認識] それ自体のみを原因として、そのように [覚知というあり方で] 生起しているがゆえにである)。

三性	三性の内容
遍計所執性	“青”などという言葉、あるいは、概念
依他起性	所取・能取という二つのものの顕現 未だ清められていない智（≡無明により変容した無二智）
円成実性	所取・能取という形相を離れている知覚（無二智） それ自体のみで確立している [知覚] 自己認識

【B】

また、以上の三性説の関係性に注目すると、『仏母般若波羅蜜多円集要義論註』（PrPPSV）においては、遍計所執性である“青”などという言葉や概念は、依他起性である「[所取や能取という多様なあり方で顕現しているもの] に対して説かれる」（【5】）と陳述され、依他起性である二つのものの顕現は、円成実性である「二つのものを有しない智の上に……二つのものとして顕現している」（【6】）と言明されている。このことから、遍計所執性は依他起性に基づき、依他起性は円成実性に基づくことが分かり、三宝尊が円成実性を根本に据えて三性を説明しようとしたことが知られる。この点が、『中辺分別論』（MAVBh）等の依他起性を根本に据える三性説と大いに異なることは言を俟たない。

そして、『中辺分別論』（MAVBh）等の一般的な三性と比較すると、以上の三性の内容のうち、一般的な三性の内容と圧倒的に異なる点が、円成実性の内容であることが明らかとなる。すなわち、一般的な円成実性が、空性というあり方を指す（【A】）のに対して、三宝尊の説においては、円成実性が知覚とされているのである。これが、三性の内容において極めて特異な点である。

よって、三宝尊の円成実性を基軸とする三性説の特徴を示せば、円成実性を所取・能取という形相を離れている知覚とすると、すなわち、自己認識をその中心に据えたところであると言うことができよう。

ところが、三宝尊の三性説は、唯識説との統合という意味において若干の問題が残る。三宝尊の見解にしたがえば、三宝尊が存在を認める認識は、円成実性に配当される自己認識であることとなる。しかるに、三宝尊は、その自己認

(20)

識から依他起性である顕現が発生する際に、「無明」の存在を自己認識とは別個に立てるために、厳密な意味での唯識説ではなくなってしまう可能性が生じてくるのである。つまり、望むと望まざるとにかかわらず、認識を根本とする一元論ではなく、自己認識と無明とによる二元論となってしまう可能性があるのである。

この点に関して、思想史上、如何なる意義があるのか。以下に最古の三性説と思しき『解深密経』(SNS)の三性説(三相説)を参照しつつ、考察してみたい。

4. 『解深密経』に見られる三相説の特徴

4. 1. 『解深密経』に見られる三相の定義

『解深密経』(SNS)においては、未だ「三性」なる術語は現れず、これらは「三相」という術語によって示される。

このうち、第一に、遍計所執相(kun brtags pa'i mtshan nyid, *parikalpita-lakṣaṇa, 完全に[概念的に]構想されているという特徴)は、『解深密経』(SNS)「一切法相品」によれば、以下のように定義されている。

SNS P15b1f./ D14a5f.: de ^[D14a6] la chos rnams kyi kun brtags pa'i mtshan nyid gang zhe na/ ji tsam du rjes su tha snyad gdags pa'i phyir chos rnams ^[P15a2] kyi ngo bo nyid dam bye brag tu ming dang brdar rnam par bzhaḡ pa gang yin pa'o// (こ[これらの三つの特徴]のうち、諸々の事物にある遍計所執相とは何か、と[問うならば]曰く——[遍計所執相とは、]すなわち、[諸々の事物を]言語的に表示するために、諸々の事物(chos, *dharma-)の独自性(ngo bo nyid, *svabhāva-)や特殊性(bye brag, *viśeṣa-)として名称(ming, *nāman-)と言語協約(brda, *saṃketa-)とによって確立された限りのものである)。【9】

以上によれば、遍計所執相とは、名称と言語協約とによって確立された独自性 (*svabhāva-, 自性)、あるいは、それらによって確立された特殊性 (*viśeṣa-, 差別)ということとなる。ここでいう独自性とは、例えば、物質 (*rūpaskandha-, 色蘊)・感受 (*vedanāskandha-, 受蘊)・表象作用 (*saṃjñāskandha-, 想蘊)・意思 (*saṃskāraskandha-, 行蘊)・認識 (*vijñānaskandha-, 識蘊) などという或る類に属する事物がある場合に、その同類の事物になくなくてはならない独自のあり方、すなわち、類的本質を意味する³。そして、この独自性は、そのような独自のあり方をもって単独で存在する個物それ自体をも表すことがある⁴。一方、特殊性とは、そのような独自のあり方をもって単独で存在する個物の上に見られる、生じているというあり方や減しているあり方などの差異を表す⁵。よって、遍計所執相とは、日常的に認知される物質などの個物は言うに及ばず、

3 齋藤 [2006] 参照。

4 Cf. SNS P24b2ff./ D22b3ff.: rnam par rtog pa'i spyod yul kun brtags pa'i mtshan nyid kyi gnas 'du byed kyi mtshan ma la/ ^[D22b4] gzugs ^[P24b3] kyi phung po zhes dang/ gzugs kyi phung po skye'o zhe'am/ 'gag go zhe'am/ gzugs kyi phung po spang ba dang/ yongs su shes ^[P24b4] pa zhes ngo bo nyid kyi mtshan nyid dam/ bye ^[D22b5] brag gi mtshan nyid du ming dang brdar rnam par bzhag (P; gzhaḡ D) pa gang lags pa de ni kun brtags pa'i mtshan nyid lags te/ (或るもの (A) が、[概念的に] 構想するものの対象領域 (rnam par rtog pa'i spyod yul, *vikalpagocara-) に対して、[すなわち、] 遍計所執相の拠り所 (kun brtags pa'i mtshan nyid kyi gnas, *parikalpita-lakṣaṇāśraya-) に対して、[すなわち、] “[諸条件によって] 作られたもの” [として過剰に肯定されている] 要因 ('du byed kyi mtshan ma, *saṃskāranimitta-) に対して、「[これは、] 色蘊である」といつて……、そして、「色蘊は、生ずるものである」と、あるいは、「色蘊は、減するものである」と、あるいは、「色蘊は、断ぜられるものである」と、あるいは、「色蘊は、悉く知られるものである」といつて、独自性という特徴 (ngo bo nyid kyi mtshan nyid, *svabhāvalakṣaṇa-) や特殊性という特徴 (bye brag gi mtshan nyid, *viśeṣalakṣaṇa-) として、名称と言語協約によって確立されたものである場合、それ (A) が、遍計所執相である)。以上においては、独自性 (*svabhāva-) の具体例と特殊性 (*viśeṣa-) の具体例とが緬い交ぜに示されているが、「[これは、] 色蘊である」と示されるものが、独自性の具体例であり、一方、「色蘊は、生ずるものである」云々と示されるものが、特殊性の具体例であると判断される。

5 註4参照。

(22)

説一切有部 (*sarvāstivādin-) 等の上座部仏教徒が独自のあり方をもって存在すると説く物質などの個物 (独自性) さえ指しており、加えて、その物質などという個物をさらに限定している多様なあり方 (特殊性) をも指しているということとなる。

なお、敦煌文書にはSNSの別訳が存在し、この別訳はSNSの古形を維持していると推測されている⁶。以上の独自性や特殊性は、SNSによれば、「名称 (ming, *nāman-) と言語協約 (brda, *saṃketa-) とによって」確立せしめられると知られるが、別訳では、この独自性や特殊性を確立せしめる要因として、SNSとは異なるものを挙げている。以下に、別訳を示す。

SNS_HAKAMAYA [1986] (E8) : + + + + + + + + + + + + + + ^[39a4] bye
brag du smra ba'i phyir mying dang mtshan ma btags pa'o// ([遍計所執相とは、すなわち、諸々の事物を] 説示するために、[諸々の事物の独自性 (*svabhāva-) や] 特殊性 (bye brag, *viśeṣa-) として名称 (mying, *nāman-) と [“有為法” として過剰に肯定されている⁷] 要因 (msthan ma, *nimitta-) とによって確立された⁸ [限りの] ものである)。【10】

これによれば、別訳では、独自性や特殊性を確立せしめる要因として、「名称」

6 高橋 [2006] 参照。

7 註14参照。

8 ここにおける「mying dang mtshan ma btags pa」は、以下に示す文により、「mying dang mtshan ma'i phyir btags pa」の意味として解釈することができる。SNS_HAKAMAYA [1986] (F12): de ji'i phyir zhe na/ de ltar mying dang mtshan ma'i phyir ^[37b5] btags pa'i mtshan ma yind gyi/ bdagi mtshan ma nyid gyis btags pa ni ma yin no// de bas na de'i mtshan nyid la ngo bo nyid myed ces bya'o// (それ[遍計所執相]は、なぜ[相無自性性であるの]か、と問うならば、何となれば、[それ[遍計所執相]は、]名称と[“有為法”として過剰に肯定されている]要因とによって確立された (mying dang mtshan ma'i phyir btags pa, *nāmanimittābhyāṃ vyavasthita-) 特徴 (mtshan ma, *lakṣaṇa-) であって、固有の特徴として確立しているものではないがゆえに、そのゆえに、それ (遍計所執相) は、相無自性性であるといわれるのである)。

(mying, *nāman-) と「[“有為法”として過剰に肯定されている] 要因」(msthan ma, *nimitta-) とが考えられていることが分かる。

以上をまとめると、遍計所執相とは、名称と言語協約とによって確立されたものであれ、あるいは、名称と「[“有為法”として過剰に肯定されている] 要因とによって確立されたものであれ、諸法の独自性（自性, *svabhāva-) や特殊性（差別, *viśeṣa-) を意味すると言うことができる。

また、第二に、依他起相(gzhan gyi dbang gi mtshan nyid, *paratantralakṣaṇa-, [それとは] 別のものに依存しているという特徴) は、『解深密經』(SNS)「一切法相品」によれば、以下のように定義される。

SNS P15b2/ D14a6f: chos rnam kyī gzhan gyi dbang gi mtshan nyid gang zhe na/ ^[D14a7] chos rnam kyī rten cing 'brel par 'byung ba nyid de/ (諸々の事物にある依他起相とは何か、と[問うならば]曰く——[依他起相とは、]諸々の事物にある諸条件によって生起するというあり方(rten cing 'brel par 'byung ba nyid, *pratītyasamutpādatā-)である)。【11】

これにより、依他起相は、諸条件によって生起するというあり方（縁生自性, *pratītyasamutpādatā-) であることが知られる。

さらに、第三に、円成実相(yongs su grub pa'i mtshan nyid, *pariṇiṣpannalakṣaṇa-, 完成しているという特徴) は、『解深密經』(SNS)「一切法相品」によれば、以下のように定義される。

SNS P15b4/ D14b1: chos rnam kyī yongs su grub pa'i mtshan nyid gang zhe na/ chos rnam kyī de bzhin nyid gang yin pa ste/ (諸々の事物にある円成実相とは何か、と[問うので]曰く——[円成実相とは、]すなわち、諸々の事物にあるそのままたるあり方(de bzhin nyid, *tathatā-) である)。【12】

これにより、円成実相は、そのままたるあり方（真如, *tathatā-) であること

(24)

が知られる。

以上をまとめると、『解深密経』(SNS)「一切法相品」における遍計所執相、依他起相、そして、円成実相の定義は、以下の表のようになろう。

諸々の事物にある三つの特徴	定義
遍計所執相 (*parikalpitalakṣaṇa-)	・ 独自性 (自性, *svabhāva-) ・ 特殊性 (差別, *viśeṣa-)
依他起相 (*paratantralakṣaṇa-)	諸条件によって生起するというあり方 (縁生自性, *pratītyasamutpādatā-)
円成実相 (*pariniṣpannalakṣaṇa-)	そのままたるあり方 (真如, tathatā-)

【C】

以上のごとく、遍計所執相、依他起相、そして、円成実相の定義は、それぞれ、端的には、独自性 (自性) や特殊性 (差別)、諸条件によって生起するというあり方 (縁生自性)、そして、そのままたるあり方 (真如) と言うことができるが、これらはまた、『解深密経』(SNS)「無自性品」において、「無自性性」(ngo bo nyid med pa nyid, *niḥsvabhāvatā-) なる語を後分に有する複合語で言い換えられる。すなわち、遍計所執相は「相無自性性」(mtshan nyid ngo bo nyid med pa nyid, *lakṣaṇaniḥsvabhāvatā-) であり、依他起相は「生無自性性」(skye ba ngo bo nyid med pa nyid, *utpattiniḥsvabhāvatā-)・「勝義無自性性」(don dam pa ngo bo nyid med pa nyid, *paramārthaniḥsvabhāvatā- (Tatpuruṣa-, 格限定複合語)) であり、そして、円成実相は「勝義無自性性」(don dam pa ngo bo nyid med pa nyid, *paramārthaniḥsvabhāvatā- (Karmadhāraya-, 同格限定複合語)) であるというのである。そして、その意味する所は、以下のごとくである。

まず、遍計所執相に該当する「相無自性性」は、特徴 (*lakṣaṇa-, 相) に関して、固有な特徴 (*svalakṣaṇa-, 自相) が欠如していること⁹、換言すれば、独

9 SNS P18b2f./ D17a3: de ci'i phyir zhe na/ 'di ltar de ni ming dang brdar rnam par gzhag pa'i mtshan nyid yin gyi/ rang gi mtshan nyid kyis rnam par gnas

自性 (*svabhāva-, 自性) が欠如していることを意味するという。

次に、依他起相に該当する「生無自性性」は、生起 (*utpatti-, 生) に関して、自身から生ずるというあり方 (*svabhāva-, 自性) が欠如していること¹⁰であり、また、同じく依他起相に該当し、格限定複合語 (Tatpuruṣa-) として解釈される「勝義無自性性」は、最高の智の対象 (*paramātha-, 勝義) に関して、その本性 (*svabhāva-, 自性) が欠如していること¹¹、つまりは、最高の智の対象とならないことであるという。

そして、円成実相に該当し、同格限定複合語 (Karmadhāraya-) として解釈される「勝義無自性性」は、それが、最高の智の対象 (*paramātha-, 勝義) であり、かつ、無自性性 (*niḥsvabhāvatā-) であること¹²を意味すると言われる。

pa ni ma yin pas ^[P18b3] de'i phyir de ni mtshan nyid ngo bo nyid med pa nyid ces bya'o// (それ(遍計所執相)は、なぜ[相無自性性であるの]か、と問うならば、何となれば、それ(遍計所執相)は、名称と言語協約によって確立された特徴であって、固有の特徴 (rang gi mtshan nyid, *svalakṣaṇa-) として確立しているものではないがゆえに、そのゆえに、それ(遍計所執相)は、相無自性性であるといわれるのである)。

- 10 SNS P18b3f./ D17a4: de ci'i phyir zhe na/ 'di ltar ^[P18b4] de ni rkyen gzhan gyi stobs kyis byung ba yin gyi/ bdag nyid kyis ni ma yin pas de'i phyir skye ba ngo bo nyid med pa nyid ces bya'o// (それ(依他起相)は、なぜ[生無自性性であるの]か、と問うならば、何となれば、それ(依他起相)は、[それとは]別のものの力により生じている[というあり方]であって、それ自身から[生じているというあり方]ではないがゆえに、そのゆえに、生無自性性であるといわれる)。

- 11 SNS P18b6f./ D17a6: chos rnam la rnam par dag pa'i dmigs pa gang yin pa de ni ngas don dam pa yin par yongs su bstan la/ gzhan gyi dbang gi mtshan nyid de ni rnam par dag pa'i dmigs pa ma yin pas de'i phyir don dam pa'i ngo bo ^[P18b7] nyid med pa nyid ces bya'o// (何であれ、諸々の事物の中に清浄[な智]の認識対象 (rnam par dag pa'i dmigs pa, *viśuddhyālabhāna-) がある場合に、私は、それ(清浄[な智]の対象)を勝義(最高[の智]の対象)であると明示したのである。しかるに、その依他起相は、清浄[な智]の認識対象ではないがゆえに、そのゆえに、勝義無自性性(最高[の智]の対象)についての本性を欠いているというあり方)といわれるのである)。

- 12 SNS P18b8f./ D17a7f: chos rnam kyis chos bdag med pa gang yin pa de ni/ de dag gi ngo bo nyid med pa nyid ces bya ste/ de ni ^[D17b1] don dam pa yin la/

(26)

さらに、『解深密経』(SNS)「無自性品」においては、先の三相とこの三無自性とが、様々な同義語で言い換えられている。以下では、その同義語について調査することにする。

4. 2. 『解深密経』に見られる三相の同義語

4. 2. 1. 遍計所執相（相無自性性）の同義語

まず、遍計所執相は、『解深密経』(SNS)「無自性品」においては、以下のよう説明される。

SNS P24b4/ D22b4f: ngo bo nyid kyi mtshan nyid dam/ bye ^[D22b5] brag gi mtshan nyid du ming dang brdar rnam par gzahag pa gang lags pa de ni kun brtags pa'i mtshan nyid lags te/ (或るもの (A) が……独自性という特徴 (ngo bo nyid kyi mtshan nyid, *svabhāvalakṣaṇa-, 自性相) や特殊性という特徴 (bye brag gi mtshan nyid, *viśeṣalakṣaṇa-, 差別相) として、名称と言語協約によって確立されたものである場合、それ (A) が、遍計所執相である¹³⁾。【13】

ここでは、遍計所執相（完全に「概念的に」構想されているという特徴）は、「独自性という特徴」（自性相）、あるいは、「特殊性という特徴」（差別相）とされ、「遍計所執相」という語に対応するように「特徴」（相）という語が付加され

don dam pa ni chos thams cad kyi ngo bo nyid med pa nyid kyis rab tu phye ba yin pas de'i phyir don dam pa ^[P19a1] ngo bo nyid med pa nyid ces bya'o// (何であれ、諸々の事物において、法無我性(chos bdag med pa, *dharmanairātmya-, [あらゆる] 事物が不変の原理を欠いているというあり方) がある場合、それ(法無我性)は、それら(諸々の事物)における無自性性(独立自存するというあり方を欠いているというあり方)であるといわれ、[かつ、] それ(法無我性)は、勝義(最高[の智]の対象)である。勝義(最高[の智]の対象)は、諸々の事物にある無自性性として露顕するがゆえに、そのゆえに、[円成実相は] 勝義無自性性(勝義である無自性性)といわれるのである)。

13 註4参照。

ている。

4. 2. 2. 依他起相（生無自性性・勝義無自性性（Tatpuruṣa-））の同義語次に、依他起相は、『解深密經』（SNS）「無自性品」においては、以下のよう

SNS P24b5f./ D22b5f.: rnam par rtog pa'i spyod yul kun brtags ^[D22b6] pa'i mtshan nyid kyi gnas 'du byed kyi mtshan ma gang lags pa de ni gzhan gyi dbang gi mtshan nyid lags ^[P24b6] te/（或るもの（B）が、[概念的に] 構想するものの対象領域（rnam par rtog pa'i spyod yul, *vikalpāgocara-, 分別所行）である場合、[すなわち、] 遍計所執相の拠り所（kun brtags pa'i mtshan nyid kyi gnas, *parikalpita-lakṣaṇāśraya-, 遍計所執相所依）である場合、[すなわち、] “[諸条件によって] 作られたもの” [として過剰に肯定されている] 要因（'du byed kyi mtshan ma, *saṃskāranimitta-, 行相）¹⁴である場合、それ（B）が、依他起相である）。【14】

これによれば、依他起相は、以下の三つの同義語で言い換えられることとなる。一つ目は、[概念的に] 構想するものの対象領域（分別所行, *vikalpāgocara-）であり、二つ目は、遍計所執相の拠り所（遍計所執相所依、

14 SNSVy P/ D41a7f.: 'du byed kyi mtshan ma zhes bya ba ni dngos po la gzugs dang/ ^[D41b1] sgra dang/ dri dang/ ro dang/ reg bya dang/ skyes pa dang/ bud med dang/ skye ba dang/ rga ba dang/ na ba dang/ 'chi ba zhes bya ba la sogs pa lta bu lhag par sgro btags pa gang yin pa ste/（“[諸条件によって] 作られたもの” [として過剰に肯定されている] 要因）（'du byed kyi mtshan ma, *saṃskāranimitta-）とは、何であれ、事物（dngos po, *vastu-）に対して、「物質である」「音である」「香りである」「味である」「触れられるものである」「男である」「女である」「生まれることである」「老いることである」「病むことである」「死ぬことである」云々と言われるがごとくに、[作られたもの（有為法）でないにもかかわらず、作られたもの（有為法）として] 過剰に肯定されているもの（lhag par sgro btags pa, *adhyāropa-）である）。

(28)

*parikalpita lakṣaṇāśraya-) であり、そして、三つ目は、“[諸条件によって] 作られたもの” (有為法) [として過剰に肯定されている] 要因 (行相, *saṃskāra nimitta-) である。

4. 2. 3. 円成実相 (勝義無自性性 (Karmadhāraya-)) の同義語

そして、円成実相は、『解深密經』(SNS) 「無自性品」においては、以下のよう

SNS P24b7f./ D22b7f.: rnam par rtog pa'i spyod yul de nyid kun brtags pa'i mtshan nyid der yongs ^[P24b8] su ma grub cing ngo bo nyid med/ de ^[D23a1] kho nas ngo bo nyid ma mchis pa nyid chos bdag ma mchis pa de bzhin nyid rnam par dag pa'i dmigs pa gang lags pa de ni yongs su grub pa'i mtshan nyid lags te/ (その同じ [概念的に] 構想するものの対象領域 (依他起相) ……は、その遍計所執相としては成立せず (yongs su ma grub, *apariniṣpanna-)、[その遍計所執相としての] 本性を欠いている (ngo bo nyid med, *niḥsvabhāva-)。まさにそのゆえに、[その同じ概念的に構想するものの対象領域 (依他起相) ……における] 無自性性 (ngo bo nyid ma mchis pa nyid, *niḥsvabhāvatā-) が、[すなわち、] 法無我性 (chos bdag ma mchis pa, *dharmanairātmya-) が、[すなわち、] ありのままたること (de bzhin nyid, *tathatā-) が、[すなわち、] 清浄 [な智] の認識対象 (rnam par dag pa'i dmigs pa, *viśuddhyā lambana-) が、円成実相である)。【15】

ここで明らかになることは、「ありのままたるあり方」(真如) と定義される円成実相は、より具体的には、依他起相が遍計所執相としての本性を欠いているということ、すなわち、依他起相が遍計所執相を本性としないという意味での「無自性性」(*niḥsvabhāvatā-) であるということである。そして、これは、さらに、あらゆる事物 (dharma-) が不変の原理 (ātman-) を欠いていることを意味する「法無我性」(*dharmanairātmya-) という語で言い換えられ、「清浄 [な

智」の認識対象」(清浄所縁, *viśuddhyālamāna-)として位置付けられることが分かる。

また、『解深密経』(SNS)「無自性品」の別の箇所において、円成実相は、以下のようにも説明されている。

SNS P19b1f./ D18a1f.: 'di ltar don dam pa ngo bo ^[D18a2] nyid med ^[P19b2] pa nyid chos bdag med pas rab tu phye ba ni rtag pa rtag pa'i dus dang/ ther zug ther zug gi dus su rnam par gnas pa kho na yin la/ de ni chos rnams kyi chos nyid du 'dus ma byas pa nyon mongs pa thams cad du bral ba yin te/ (何となれば、法無我性として露顕する勝義無自性性 (= 最高 [の智] の対象である無自性性) は、不変に、そして、恒常に、諸々の法における法性 (chos nyid, *dharmatā-) として確立しているものにほかならず、そして、それ (法無我性として露顕する勝義無自性性) は、無為 ('dus ma byas pa, *asamṣkṛta-, [諸条件によつて] 作られたものでないもの) であつて、一切の煩惱から隔絶したもの (nyon mongs pa thams cad du bral ba, *sarvakleśaviprayukta-) であるからである)。【16】

これによれば、円成実相は、「法性」(*dharmatā-, 事物たること)、「無為」(*asamṣkṛta-, [諸条件によつて] 作られたものでないもの)、そして、「一切の煩惱から隔絶したもの」(一切雑染不相応, *sarvakleśaviprayukta-) と言ひ換えられることが分かる。なお、「一切の煩惱から隔絶したもの」とは、いわゆる涅槃のことであると言える¹⁵。

以上をまとめると、『解深密経』(SNS)「無自性品」における遍計所執相、依

15 SNS P19b3f./ D18a3f.: de ni nyon mongs pa thams ^[P19b4] cad dang bral ba'i phyir gzod ma nas zhi ba dang/ rang bzhin gyis yongs su mya ngan las 'das ^[D18a4] pa yin te/ (それ (法性として確立している無為) は、一切の煩惱から隔絶しているがゆえに、初めから寂靜なもの (gzod ma nas zhi ba, *ādiśānta-) であり、そして、本来的に涅槃の状態にあるもの (rang bzhin gyis yongs su nya ngan las 'das pa *prakṛtiparinirvṛta-) である)。

(30)

他起相、そして、円成実相の同義語は、以下の表のようになろう。

特徴	定義	同義語
遍計所執相 (相無自性性)	自性・差別	<ul style="list-style-type: none"> ・独自性という特徴 (自性相, *svabhāvalakṣaṇa-) ・特殊な特徴 (差別相, *viśeṣalakṣaṇa-)
依他起相 (生無自性性) (勝義無自性性 (Tp.))	縁生自性	<ul style="list-style-type: none"> ・[概念的に] 構想するものの対象領域 (分別所行, *vikalpagocara-) ・遍計所執相の拠り所 (遍計所執相所依, *parikalpitalakṣaṇāśraya-) ・“有為法”[として過剰に肯定されている] 要因 (行相, *saṃskāranimitta-)
円成実相 (勝義無自性性 (Kdh.))	真如	<ul style="list-style-type: none"> ・無自性性 (*niḥsvabhāvatā-) ・法無我性 (*dharmanairātmya-) ・法性 (*dharmatā-) ・清浄 [な智] の認識対象 (清浄所縁, *viśuddhyā lambana-) ・無為 (*asaṃskṛta-) ・一切の煩惱から隔絶したもの [=涅槃] (一切雑染不相応, *sarvakleśaviprayukta-)

[D]

4. 3. 『解深密経』に見られる三相説の特徴の一側面

さて、『解深密経』の三相説（三性説）については、すでに、高橋 [2002] により、五事説との関連性が指摘されている。

ここに言う五事説とは、相 (nimitta-)・名 (nāman-)・分別 (vikalpa-)・真如 (tathatā-)・正智 (samyagiñāna-) という5つの概念により一切の事物を説明せんとする学説である。そして、この学説は、特に、『瑜伽師地論』「摂決摂分」の中で詳説される議論である。しかるに、思想的な観点からすると、

この「摂決摂分」における五事説は、『菩薩地』『真実義品』における実在 (vastu-) に関する議論を直接的に継承し、発展させたものであるとされる¹⁶。すなわち、『菩薩地』『真実義品』においては、実在の考察に際して、すでに、以上の五事を構成する要素のうち、相・名・分別・真如という4つの術語を用いているが、「摂決摂分」では、この4つの術語を受け継ぎつつ、さらに正智という概念を加えて、この五事をもって『菩薩地』『真実義品』における実在をより精緻に分析しようと試みたというのである¹⁷。

そして、三相説との関連について言えば、まず、『解深密経』(SNS)「一切法相品」においては、円成実相が「真如」(*tathatā-)として定義されている([12])が、これは五事の1つである真如に一致するものである¹⁸。

次に、『解深密経』(SNS)「無自性品」においては、依他起相の同義語として、「有為法」[として過剰に肯定されている]要因(行相, *saṃskāranimitta-)が挙げられている([14])が、これは五事の1つである相に対応するものである¹⁹。

また、遍計所執相は、『解深密経』(SNS)「一切法相品」においては、「諸々の事物の独自性や特殊性として名称(*nāman-)と言語協約(*saṃketa-)とによって確立された限りのもの」([9])と言われ、別訳においては、「[諸々の事物の独自性や] 特殊性として名称(*nāman-)と[“有為法”として過剰に肯定されている] 要因(*nimitta-)とによって確立された[限りの] もの」([10])と言われているが、ここにおいて遍計所執相を成立させる要因の一つとして挙げられる「名称」(*nāman-)も、五事のうちの名と一致する²⁰。

そして、『解深密経』(SNS)「無自性品」においては、依他起相の同義語として、「[概念的に] 構想するものの対象領域」(rnam par rtog pa'i spyod yul, *vikalpagocara-, 分別所行)なる語が挙げられている([14])が、この語のうちに現れる「[概念的に] 構想するもの」(分別, *vikalpa-)は、五事のうちの

16 高橋 [2002] [2005; § 2.2] 参照。

17 高橋 [2005; § 2.2] 参照。

18 高橋 [2002] [2006] 参照。

19 高橋 [2002] [2006] 参照

20 高橋 [2005; § 2.2] 参照。

(32)

分別である²¹。

さらに、『解深密経』(SNS)には、「正智」(*samyagjñāna-)という術語こそ現れないが、『解深密経』(SNS)「無自性品」において、円成実相の同義語として挙げられる「清浄 [な智] の認識対象」(rnam par dag pa'i dmigs pa, *viśuddhyā lambana-) という語 ([15]) のうちの「清浄 [な智]」(*viśuddhi-) は、五事のうちの正智に相当するものであると見当が付く²²。

以上のごとく、『解深密経』の三相説は、『菩薩地』に端を発し、「摂決摂分」において五事説として確立される議論を背景としてしていると推測されるが、この五事同士の関係性はどのようになっているのであろうか。

まず、比較的に明瞭であるのは、分別と相、そして、正智と真如の関係である。

上述の通り、五事説の「相」(nimitta-) は、依他起相の同義語とされている「“有為法” [として過剰に肯定されている] 要因」(行相, *saṃskāranimitta-) に相当するものと考えられるが、この行相なるものは、さらに、「[概念的に] 構想するものの対象領域」(分別所行, *vikalpagocara-) とも言い換えられている。よって、この「相」は、「[概念的に] 構想するもの」(分別, *vikalpa-) によって認識される対象であり、「分別」(*vikalpa-) は、それを認識するものということとなる。また、円成実相の定義に用いられ、五事説にも現れる「真如」(*tathatā-) は、「清浄 [な智] の認識対象」(清浄所縁, *viśuddhyā lambana-) と言い換えられている。よって、この「真如」は、五事説の「正智」(*samyagjñāna-)

21 高橋 [2005; §2.2] 参照。

22 Cf. SNS P12a7f./ D11a7f: de bzhin nyid kyi rjes su 'brang ba gnyis med pa'i shes ^[P12a8] pa la rten pa de nyid kyis don ^[D11b1] dam pa thams cad du ro gcig pa'i mtshan nyid nges par 'dzin pa dang/ mngon par rtogs pa kho nar byed de/(その、真如(そのままたるあり方)に随応している[所取・能取という]二つのものを有しない智(gnyis med pa'i shes pa, *advayajñāna-)のみを抛り所とすることによって、必ず、あらゆる[事物]における同一の性質という特徴(ro gcig pa'i mtshan nyid, *ekarasalakṣaṇa-)が勝義(最高[の智]の対象)であると確定され、了悟されるのである)。この文から、勝義が、「二つのものを有しない智」(不二智, *advayajñāna-)の対象となることが知られるがゆえに、この不二智もまた「正智」に相当するものであると推測されよう。

と対応するものと考えられる「清浄 [な智]」(*viśuddhi-) によって認識される対象であり、「正智」は、それを認識するものということになる。以上より、少なくとも、分別と相、そして、正智と真如の関係に関しては、認識論上における認識するもの（認識）と認識されるもの（認識対象）の関係にあると言えることができる。そして、さらに、五事説の「相」が依他起相に相当し、「真如」が円成実相に相当することを考慮すると、依他起相は、「分別」という認識によって認識される対象であり、円成実相は、「正智」という認識によって認識される対象であるという関係が成立することが知られる。また、この関係性から類推すると、遍計所執相も、何らかの認識によって認識される対象を表すのではないかという推測が立つ。そして、実際に、遍計所執相の同義語として提示される「自性相」(*svabhāvalakṣaṇa-) や「差別相」(*viśeṣalakṣaṇa-) という語（【13】）は、「これは物質である」とか、「この物質は生じているものである」とかいう認識を成立させる²³特徴、つまりは、認識される対象を意味する。しかるに、このような対象を認識するものが、先述の「分別」と考えられているのか、あるいは、それとはまた別のもの（例えば、「遍計」(*kun tu rtog pa, *parikalpa-) など）と考えられているのかは、『解深密経』においては明示されていない。

以上をまとめると、以下の表のように示すことができよう。

《認識論的構造として理解した場合の五事と三相の関係性》

認識	認識対象	
?	[自性相] (*svabhāvalakṣaṇa-) [差別相] (*viśeṣalakṣaṇa-)	[遍計所執相]
分別 (*vikalpa-)	相 (*nimitta-)	依他起相
正智 (*samyagjñāna-)	真如 (*tathatā-)	円成実相

【E】

23 註4参照。

(34)

以上のように認識論的構造として理解した場合には、五事のうちの分別と相、そして、正智と真如は、認識と対象の関係となっており、その関係性を通して、遍計所執相・依他起相・円成実相も、各種の認識の対象の特徴を表したものであることが知られる。しかるに、この場合には、五事のうちの「名」(*nāman-)が、五事の項目の中で、あるいは、三相の中で、どのように位置付けられるかが説明できない。

そこで、「名」とその他の項目の関連性を示す表述を探すと、先に示した遍計所執相の定義に到達する。すなわち、『解深密経』(SNS)「一切法相品」における「名称(*nāman-)と言語協約とによって確立された限りのもの」という記述〔9〕であり、別訳における「名称(*nāman-)と〔“有為法”として過剰に肯定されている〕要因とによって確立された〔限りの〕もの」という記述〔10〕である。特に、「名」に注目すれば、遍計所執相は、この「名」によって確立されるということになる。つまり、遍計所執相と「名」とは、成立させられるもの(果)と成立させるもの(因)という因果関係となっている²⁴ということである。

さらに、この成立させられるものと成立させるものという因果関係に注目すると、依他起相である「相」についても、以下のような記述が散見される。

SNS P5a3ff./ D4b7f.: gang la ^[P5a4] 'dus byas dang/ 'dus ma byas kyi 'du shes dang/ 'dus byas dang/ 'dus ma byas kyi rnam grangs kyi ^[D5a1] 'du shes 'byung ba/ rnam par rtog pa las byung ba/ 'du byed kyi mtshan ma sgyu ma lta bu 'di ni yod/ blo rnam par rmongs par byed pa ^[P5a5] 'di ni yod do snyam du sems shing (或るもの (A) に対して、「有為である」・「無為である」という概念 ('du shes, *saṃjñā-) と「有為である」・「無為である」

24 Cf. SNS P16b3/ D15a6: de la mtshan ma dang 'brel pa'i ming la (D: las P) brten nas ni kun brtags pa'i mtshan nyid rab tu shes so// (これらのうち、遍計所執相 (kun brtags pa'i mtshan nyid, *parikalpita-lakṣaṇa-) は、〔“有為法”として過剰に肯定されている〕要因 (mtshan ma, *nimitta-) と結び付いている名称を条件としていると〔如実に〕知られるべきである)。

ということに類似する概念 (rnam grangs kyi 'du shes, *paryāyasamjñā-) が生ずるが、「その、[概念的に] 構想するものから生じているもの (rnam par rtog pa las byung ba, *vikalpasambhūta-) であり、“[諸条件によって] 作られたもの” [として過剰に肯定されている] 要因 ('du byed kyi mtshan ma, *saṃskāranimitta-) であり、幻 (sgyu ma, *māyā-) のごとくであるもの (A) は、存在する」「その、知を錯乱させるもの (A) は、存在する」と考えて……。【17】

先述の通り、ここにおける「“[諸条件によって] 作られたもの” [として過剰に肯定されている] 要因」(行相, *saṃskāranimitta-) は、五事説における「相」(*nimitta-) に相当すると考えられるが、これは、「[概念的に] 構想するものから生じているもの」(*vikalpasambhūta-)、すなわち、「分別」から生じているものと言われている。よって、このことから、依他起相と「分別」もまた、成立させられるもの (果) と成立させるもの (因) という観点からの因果関係となっている²⁵ということが出来る²⁶。

それでは、円成実相である「真如」も、何らかの事物との間に以上のような因果関係が想定されているのかと言えば、それについては、以下のように否定

25 Cf. SNS P16b3f./ D15a6: gzhan gyi dbang gi mtshan nyid la kun brtags pa'i mtshan nyid ^[P16b4] du mngon par zhen pa la brten nas ni gzhan gyi dbang gi mtshan nyid rab tu shes so// (依他起相 (gzhan gyi dbang gi mtshan nyid, *paratantralakṣaṇa-) は、依他起の特徴 (gzhan gyi dbang gi mtshan nyid, *paratantralakṣaṇa-) に対して遍計所執の特徴 (kun brtags pa'i mtshan nyid, *parikalpitalakṣaṇa-) であると執著することを条件としていると [如実に] 知られるべきである)。ここにおける「執著すること」は、「分別」の働きとみることができよう。

26 このことにより、「分別」の対象である所の「相」は、一方で、「分別」という原因から生ずる結果であるということになる。よって、ここには、三相説 (三性説) と唯識説との結合の兆しを見ることが出来る (高橋 [2002] 参照)。ただし、『大乘莊嚴經論』や『中辺分別論』等の後世の論書に見られるような唯識説を中心に据えて三相を統合せんとする意図は未だ明瞭とは言えない。

されている。

SNS P12b5/ D11b5: de bzhin nyid (de bzhin nyid P; *omit* D) don dam pa/ chos bdag med pa rgyu las byung ba ma yin pa dang/ 'dus byas ma yin pa dang (真如 (de bzhin nyid, *tathatā-, そのままたること) [であるところの] 勝義 (don dam pa, *paramārtha-, 最高 [の智] の対象) [は、つまりは、] 法無我性 (chos bdag med pa, *dharmanairātmya-, [あらゆる] 事物が不変の原理を欠いていること) は、原因から生ずるものでもなく、有為 [法] (諸条件によって作られたもの) でもなく……)。【18】

これによれば、「真如」は、原因から生ずるものではないから、成立させられるものと成立させるものという意味での原因を持たないということとなる²⁷。

以上に述べた五事と三相との間に見られる成立させられるもの (果) と成立させるもの (因) という因果関係をまとめると、以下の表のように示すことができる。

27 Cf. SNS P16b4f./ D15a6f.: gzhan ^[D15a7] gyi dbang gi mtshan nyid la kun brtags pa'i mtshan nyid du mngon par zhen pa med pa la brten nas ni yongs su grub pa'i ^[P16b5] mtshan nyid rab tu shes so// (円成実相 (yongs su grub pa'i mtshan nyid, *pariniṣpannalakṣaṇa-) は、依他起の特徴 (gzhan gyi dbang gi mtshan nyid, *paratantralakṣaṇa-) に対して遍計所執の特徴 (kun brtags pa'i mtshan nyid, *pari-kalpitalakṣaṇa-) であると執著しないことを条件としていると [如実に] 知られるべきである)。この表現を文字通りに受容するとすれば、円成実相は、無執著を原因として生ずる結果のごとくに理解されるから、「原因から生ずるものではない」という文言と矛盾することになってしまう。よって、ここにおける意図は、「円成実相は、原因を持たずに既に成立しているものであるが、執著により如実に知られることがない。ゆえに、執著がなくなることにより、既に成立している円成実相が如実に立ち現れることとなる」ということを表述したものであると理解されるべきであろう。

《成立に関わる因果関係的構造として理解した場合の五事と三相の関係性》

成立させられるもの（結果）		成立させるもの（原因）
[自性相] (*svabhāvalakṣaṇa-) [差別相] (*viśeṣalakṣaṇa-)	遍計所執相	←名 (*nāman-)
相 (*nimitta-)	依他起相	←分別 (*vikalpa-)
真如 (*tathatā-)	円成実相	

【F】

以上のごとくに、三相と五事との関係性は、認識論的構造（【E】）と因果関係的構造（【F】）とによって理解されることが分かるが、以下では、さらに、『解深密経』（SNS）において、三相間の関係性が如何に考えられているのかについて考察する。

まず、遍計所執相と依他起相との関係性については、再三再四、「或るものが……遍計所執相の拠り所である場合……それが、依他起相である」と言われている（【I4】）ことから、遍計所執相が、依他起相に依存するもの（能依）であり、依他起相が、遍計所執相の拠り所（所依）となることが知られる。

次に、依他起相と円成実相との直接的な関係性については、概して曖昧ではある。しかし、『解深密経』（SNS）「勝義諦品」に次のような議論がある。まず、「有為」や「無為」などというものは、言葉や概念にすぎない（遍計所執相の否定）。そして、その「有為」や「無為」によって指し示されるもの、つまり、その言葉や概念の直接的な拠り所もまた、その言葉や概念と同等である²⁸（依

28 SNS P3b3/ D3b1: 'dus byas dang 'dus ma byas su ma gtogs pa gang ci brjod kyang de yang de dang 'dra ba nyid du gyur/ de yang de dang 'dra ba nyid du 'gyur ro//（[そして、] 如何なるものであらうとも、或るもの（A）が、「有為である」[という語]とも「無為である」[という語]とも隔絶しているとしたならば、[「有為である」とか「無為である」とか] 語られたとしても、それ（A）はまた、それ[らの「有為である」という語や「無為である」という語]と同

(38)

他起相の否定)。それでは、その言葉や概念の拠り所が全く存在しないかと言えば、以下に示すがごとく、そうではないと言われる。

SNS P3b3ff./ D3b1f.: brjod ^[P3b4] pa ni dngos po med pa ^[D3b2] can yang ma yin te/ dngos po de yang gang zhe na/ 'phags pa rnam kyis (P; kyi D) 'phags pa'i shes pa dang/ 'phags pa'i mthong bas brjod du med par mngon par rdzogs par sangs rgyas pa gang ^[P3b5] yin pa ste/ (しかしながら、[そうであるからと言って、] 言葉は、根拠 (dngos po, *vastu-) を有しないというわけでもない。それでは、その[言葉の] 根拠とは何かと問うならば、聖者たちは、聖者の智 ('phags pa'i shes pa, *āryajñāna-) と聖者の見 ('phags pa'i mthon ba, *āryadr̥ṣṭi-) によって、言葉から隔絶したもの (brjod du med pa, *nirabhiḷāpa-) として、或るもの (A) を覚る [が、それ (A) こそが、言葉の根拠である]]。【19】

以上に述べられる「聖者の智」は、五事説に言われる「正智」に相当するものであろう。そして、「言葉から隔絶したもの」は、その聖者の智によって知覚されるものとされているから、これが五事説における「真如」に相当することが知られる。また、「真如」は円成実相であるから、「言葉や概念から隔絶したもの」は、円成実相であるということとなる。よって、ここにおいては、言葉や概念（遍計所執相）の拠り所が、実は、言葉や概念から隔絶した真如（円成実相）であると言われていることとなる。

よって、これまでの議論（【E】【F】）と勘案すると、以下のことが明らかとなる。すなわち、円成実相と依他起相は、遍計所執相の拠り所となる点において共通する。しかるに、両者の違いは、認識論的観点からすれば、円成実相が正智の対象であることに対して、依他起相が分別の対象であるということであり、そして、因果関係の観点からすれば、円成実相が原因によらない永久不変の実在であるのに対して、依他起相は分別を原因として成立しているものであ

等であることになってしまうのである)。

るということである。

そして、円成実相と依他起相とが、いずれも、遍計所執相の拠り所であるということから推測すれば、円成実相と依他起相とは、実質的には同一のものなのではないかと考えることができる。しかるに、両者が全く同一かと言えば、そうではなく、円成実相がありのままの真如であるのに対して、依他起相は、分別に影響を及ぼされることにより、あるいは、分別によって捉えられることにより、変容した真如、あるいは、変容したかたちで捉えられた真如であると解釈することができる。そうであるとすれば、まことの真如（円成実相）は、言葉を隔絶したものであるがゆえに、直接的には、言葉（遍計所執相）の拠り所とはならないが、分別によって変容した真如（依他起相）を介して、間接的な言葉の拠り所となっているということができる²⁹。

これらの事柄をまとめると、以下の表のように示すことができよう。

《三相の関係性》

成立させられるもの（結果）		成立させるもの（原因）
遍計所執相	言葉や概念 《能依》	←名 (*nāman-)
依他起相	《所依》 変容した真如 〈能依〉	←分別 (*vikalpa-)
円成実相	〈所依〉 真如	

【G】

さらに、以上に述べてきた『解深密経』（SNS）の三相説の特徴の一側面（【E】【F】【G】）を総括すると、以下の図のごとくにまとめることができよう。

29 高橋 [2005; § 2.2] [2006] 参照。

認識論的構造			成立に関する因果関係の構造	
認識主体	認識対象		結果	原因
?	[自性相] (*svabhāvalakṣaṇa-) [差別相] (*viśeṣalakṣaṇa-)	遍計所執相	言葉や概念 《能依》	←名 (*nāman-)
分別 (*vikalpa-)	相 (*nimitta-)	依他起相	《所依》 変容した真如 〈能依〉	←分別 (*vikalpa-)
正智 (*samyagjñāna-)	真如 (*tathatā-)	円成実相	〈所依〉 真如	

[H]

5. まとめ

三性説（三相説）の思想史的背景に、以上のような五事説の議論があることを考慮すると、『中辺分別論』（MAVBh）などに見られる依他起性を基軸とする三性説にも、三宝尊の円成実性を基軸とする三性説にも、それぞれ、特有の問題点と思想史上の意義とがあることが知られる。

まず、依他起性を基軸とする三性説は、所取・能取の顕現を有する識としての虚妄分別の存在を宣言する（【1】）。この場合、虚妄分別は、所取・能取の顕現を有するものであることにより、遍計所執相の所依となり、かつ、所取・能取を概念的に構想する識であるがゆえに、そのような遍計所執相の所依を成立させる要因ともなる（【2】【3】）。そして、五事説においては、遍計所執相の所依となるものは「相」であり、また、その「相」を成立させる原因は「分別」である（[H]）。よって、依他起性を基軸とする三相説においては、五事説における「相」と「分別」とを虚妄分別に包含されるものとして、一括して依他起性に配当したこととなる。よって、ここにおける思想史上の意義は、唯識説に基づいて「分別」の中に「相」を編入したことであると言える。

なお、「名」に関しても、SNSは、遍計所執相と「名」とを、それぞれ、成立させられる結果と成立させる原因として繊細に区別しているが、『中辺分別

論』などの後の文献においては、両者は、特別な議論を経ることもなく、同一視されているに到っている（飛田 [2017；§3] [2018；§2.2] 参照）。

ところが、首尾よく一切の事物を唯識説に統合したかに見えた依他起性を基軸とする三性説であるが、五事説との関連から見ると、「正智」が唯識説に統合されていないという問題点が残ることが分かる。例えば、依他起性を雑染と清浄とに二分する「依他二分説」などは、この問題点を解決しようとした議論であると考えられるが、このような説からも依他起性を「唯識」の識とするだけでは解決しない問題のあることが知られるのである。

三性	三性の内容	統合される五事	統合されない五事
遍計所執性	二つのもの	名称	
依他起性	虚妄分別 顕現を有する識	相＝分別	
円成実性	空性	真如	正智

[1]

次に、三宝尊の円成実性を基軸とする三性説は、「相」と「分別」とがともに虚妄分別に包含されるという考え方を先述の依他起性を基軸とする三性説から継承した。そして、さらに、自己認識である無二智を円成実性に配当することにより、五事説における「正智」の中に「真如」を編入することに成功した。というのも、無二智は、自己を認識対象とするがゆえに、正智自体が、とりもなおさず、真如となるからである。ここにおける思想史上の意義は、自己認識に基づく唯識説に立つことにより、依他起性を基軸とする三性説においては統合しきれなかった五事説の「正智」を三性説の中に統合したことであると言える。

しかし、これにも問題点が残ることとなる。三宝尊は、円成実性である自己認識から依他起性である顕現が発生することを説明する際に、自己認識とは別個のものとして「無明」の存在を立てざるをえなくなったのである。このことにより、五事は三性に統合されたものの、三性の外に、新たに「無明」を設定

(42)

することとなったのである。

三性	三性の内容	統合される五事	統合されない五事
遍計所執性	言葉あるいは概念	名称	
依他起性	二つのものの顕現 未だ清められていない智 (無明により変容した無二智)	相＝分別	[←無明]
円成実性	無二智 自己認識	真如＝正智	

[J]

三宝尊が説いた円成実性を基軸とする三性説には如何なる特徴があるか。また、この三性説には如何なる意義があるか。小稿では、このことを問題として考察してきたが、以上からすれば、円成実性を基軸とする三性説の特徴は、所取・能取という形相を離れた自己認識（無二智）を「唯識」の識と定めて、それを三性説の中心に据えたところであり、そして、この三性説の思想史上の意義は、所取・能取という形相を離れた自己認識（無二智）を円成実性に配当することにより、五事説における「正智」の中に「真如」を編入したことであると言うことができる。

略号

AAJP

Anekāntajayapātākā- (Haribhadra Sūri-).

"Anekāntajayapātākā by Haribhadra Sūri: with his own commentary and Muncandra Sūri's supercommentary," Critically edited with introd. notes and appendices by H.R. KAPADIA, Baroda : Oriental Institute, 1947.

D

デルゲ版西蔵大蔵經。

高野山大学附属図書館監修『デルゲ版西蔵大蔵經DVD-ROM版』大阪：小林写真工業株式会社。

- MAVBh *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* (Vasubandhu).
 "Madhyāntavibhāga-bhāṣya: A buddhist philosophical treatise edited for the first time from a sanskrit manuscript," ed. Gajin M. NAGAO, Tokyo : Suzuki Research Foundation, 1964.
- P 北京版西藏大藏經。
 "Tibetan Tripitaka, Peking edition," Tokyo : Tibetan Tripitaka Research Institute, 1955-58.
- PrPPS *Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgraha-* (Dignāga).
Dignāga, sein Werk und seine Entwicklung, ed. Erich FRAUWALLNER, "Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens," Vol. 3, p. 140-p. 144, Wien : Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1953.
- PrPPSV *Prajñāpāramitāpiṇḍārthasaṃgrahavivarṇa-*, Tibetan translation: 'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin ma bsodus pa'i tshig le'ur bya pa'i rnam par 'grel pa (Triratnadāsa).
 Qv. D No. 3810/ P No. 5208.
- SNS *Samdhinirmocanasūtra-*, Tibetan translation: 'phags pa dgongs pa nges par 'grel pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo.
 Qv. D No. 106/ P No. 774.
- SNS_HAKAMAYA [1986] *Samdhinirmocanasūtra-*, Old Tibetan translation.
A Comparative Edition of the Old and New Tibetan Translations of the Samdhinirmocana-sūtra (I), ed. Noriaki HAKAMAYA, 『駒澤大学佛教学部論集』 Vol. 17, p. 616-p. 600, Tokyo : 駒澤大学, 1986.
- SNS_HAKAMAYA [1987] *Samdhinirmocanasūtra-*, Old Tibetan translation.
A Comparative Edition of the Old and New Tibetan Translations of the Samdhinirmocana-sūtra (II), ed. Noriaki HAKAMAYA, 『駒澤大学佛教学部研究紀要』 Vol. 45, p. 354-p. 320, Tokyo : 駒澤大学, 1987.
- SNSVy *Samdhinirmocanasūtravyākhyāna-*, Tibetan translation: 'phags pa dgongs pa nges par 'grel pa'i mdo'i rnam par bshad pa (Klu'i rgyal mtshan).

- 齋藤 直樹 [2006] Qv. D No. 4358/ P No. 5845.
「自性の特異性：『俱舍論』に表れる説一切有部の教義学上の基礎概念」『印度学仏教学研究』第54巻第2号、p.(183)-p.(189)、東京：印度学仏教学学会。
- 高橋 晃一 [2002] 「『解深密経』と五事説の関連について」『仏教学』第44巻、p. 71-p. 89、東京：仏教思想学会。
- 高橋 晃一 [2005] 『『菩薩地』『真実義品』から「摂決摂分中菩薩地」への思想展開：vastu概念を中心として』東京：インド学仏教学叢書編集委員会。
- 高橋 晃一 [2006] *A Premise of the Trilakṣaṇa Theory in the Saṃdhinirmocana-sūtra*, 『印度學佛教學研究』 Vol. 54 (3), p. 1197-p. 1204, Tokyo : 日本印度学仏教学会.
- 飛田 康裕 [2017] 「『般若心経』の秘められた意図：瑜伽行派文献における「十種散乱」を手がかりに」『研究年誌』第61号、p.(1)-p.(40)、東京：早稲田大学高等学院。
- 飛田 康裕 [2018] 「『般若心経』の秘められた真実：瑜伽行派文献における「十種散乱」を手がかりに」『研究年誌』第62号、p.(9)-p.(66)、東京：早稲田大学高等学院。
- 服部 正明 [1961] 「ディグナーガの般若経解釈」『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』第9巻、p. 119-p. 136、大阪：大阪府立大学。
- 兵藤 一夫 [1990] 「三性説における唯識無境の意義（1）」『大谷学報』第69巻第4号、p. 25- p. 38、京都：大谷大学大谷学会。
- LAMOTTE, Étienne [1935] "Saṃdhinirmocana sutra : l'explication des mystères, Texte Tibétain édité et traduit par Étienne Lamotte," Louvain : Bureaux du Recueil.

小稿は、早稲田大学特定課題研究助成費（2018K-413）の成果の一部である。